

岡村家に継承される古文書より

大工棟梁に授与される

密教秘法（仮称）

資料綴込み順序

- 一 大工棟梁が授与される密教秘法（仮称）—その解説……………（2枚）
- 二 古文書原本（縮小コピー）……………（2枚）
- 三 解説の部 大工棟梁への密教秘法授与（仮称）……………（8枚）

以上の順に綴じ込んであります。

大工棟梁が授与された密教秘法（仮称）―その解説

一 密教について

仏教には色々な宗派がありますが、その中に「密教」という宗派があって、その密教にも二つの種類があります。天台密教と真言密教がそれです。当古文書に出てくるのは真言密教です。これは平安時代の初め、空海（弘法大師）によって中国の唐から伝えられたものです。

二 当古文書（大工棟梁への密教秘法）の解説に当たって

(一) 当古文書写し（コピー）はまず上段に何枚かを次々と並べ、次に下段へ、これまた何枚か次々と並んでいます。だからまず上半分を先に読み、上段を全部読み終わった段階で、次に下段を初めから読んでいきます。

古文書に№1、2、3……と、№8までマジックで番号がついていますが、その番号と解説プリントの番号とは合致しています。だからその順序で読んでください。

(二) プリントの解説の仕方は、上段が原文の活字化（但し当用漢字に直す）、下段はその上段の文に対応して、読み方とか解釈とか、また意味とかを補っています。

(三) 文中のところどころに、わけの分からぬ記号のような文字「梵字」が出てきます。梵字とは仏教が生まれた古代インドの文字で、中国や日本では、この梵字に呪術的威力があると考え、権威付けとして仏教ではしばしば使われるものです。蛇足ですがお墓でも刻まれているものがあります。

(四) 「お唱え」について

お唱えは宗派によってまちまちです。たとえば密教より遅く日本に伝わったもので、浄土宗や浄土真宗のお唱えは「ナムアマミダブツ」、日蓮宗のお唱えは「ナムミョウホウレンゲキョウ」、真言宗では「ナムダイシヘンジョウウゴンゴウ」などいろいろあります。

密教のお唱えは拜む対象によりまちまちですが、最後が「……ソワカ」で終わる点が特徴です。当古文書文中でもしばしば「……ソワカ」のお唱えが出てきます。

(五) 古文書や解説のNo.1では、お唱えの全体的な事柄が書いてあるようですが、紙の破損や虫喰いなどで字が欠けていて十分な解説はできません。

(六) No.2・No.3……等で文中、三三ハ、四二ハ、五二ハ、六二ハ……と、十八二ハまでありますが、最初の一ニハと二ニハが欠如、また十二ハ、十一ニハ、十二ニハも欠けています。従って、ここに何が書いてあるのか分かりません。

(七) 「第三ニハ」(以下第四、第五など……と省略)では大日如来という仏様にお唱えします。第四では文殊菩薩へ、第五・第六では地藏菩薩へ、第七では阿弥陀如来へ、第八では釈迦如来へお唱えをせよ、と書いています。

(八) No.5の第十三に「内縛印」、No.6の第十四に「外縛印」を結んでお唱えせよ、と書いていますが、これは合掌印のことで、これについて若干説明しましょう。

我々が普段仏様を拝む時、手を合わせますが、これを正式には「金剛印合掌」と言います。内縛印や外縛印はその変形です。

①「内縛印」は、両手の人差し指から小指を第二関節から曲げて交差させ、第一関節から先を隠す合掌のやり方を云います。

②「外縛印」は、両手十本の指を交差させて、しっかりと握り締める合掌のやり方を指します。

合掌印にはこのようにいくつか種類があるのです。

(九) あとは解説の部をよんでみてください。とりわけ第十七 (No.7) は「大工」という言葉がどのようにして生まれて来たのか、がわかって興味深いものがあります。

ともあれ原本は仏教用語ばかりなので、よくわからないところがありますが、私の分かる範囲内で解説してあります。

（原文筆写―但し常用漢字に直している）

（紙の虫食いで欠字の箇所はワク囲いにした）

（カナで書いてある箇所はすべて口でお唱えする言葉）

2字？欠破損 近印信十八通之事

※意味―密教秘法一八通のこと

3字？欠破損 衛尉朝清大事

一兒溪大事

薬師并无所不至印

文字欠破損 埵积迦葉師目月

梵字3字 （意味：最初の一字―観世音菩薩、二字目―文殊菩薩、三字目―大請願を表す）

一神代ノ神モ聞シ召シ許サセ給フ

（読み）神代の神も聞こし召し許させ給う

欠字 不浄

二遍

虫喰い字欠

本地観音

※本地観音もとの姿は観音様の意

欠字 口伝

ヲンサラサラ バサラタラタラ ソワカ

※片かな―密教のお唱え

紙破損欠字之、其後此文読メ

※読み方―其の後にこの文読メ

衆怨悉退散

妙音観世音

重拳印口伝アリ

オンサラサラ バサラタラタラ ソワカ

※拜むときのお唱え

衆一時可修之、其後此文読メ

※衆には時にこれを修むべし、その後（オンサラサラ・・・の呪文）この文を唱えよ

衆怨悉退散

妙音観世音

梵音海潮音

勝彼世間音

以上、どんな時、どんな仏にお唱えするか、を書いてあるが、欠字が多く、全体の意味をとるのが困難、密教には唱える呪文が目的により色々と異なる

三三六 印信 本地大日

※本地大日もとの姿は大日如来

梵語五字ハバサラドハン智拳印

児屋ニ入テ先ツ以咒印可修、又水ヲ新キ器一 読み〓児屋に入つて先ず以つて咒印を修むべし、又

水を新しき器に

取り硯水ヲ、墨ヲ可摺ル、又云、水ハ是无熟ノ地 硯水を取り、墨を摺るべし、又云う、水はこ

の无熟の地

大悲ノ智水 墨ハ是隆嚴三昧ノ右墨也

大悲の智水、墨はこれ隆嚴三昧ノ右墨也

胎金両部真言以テ摺る入木ニ写事

胎金両部真言以つて摺り入る木に写すの事

神明 三宝諸仏諸神 智見シ給エ

※三宝とは〓仏・お経・僧侶

この一行の意味〓神も仏もよく見てください。

第三は、大工が仕事小屋に入つて先ず行つ心構えが書いてある。

第三の前に第一・第二があるはずであるが、欠けている。

四二八墨差之大事 本地文殊

※本地文殊もとの姿は文殊菩薩

6字梵字 (その発音) || ランアラハシヤナソワカ

今此三界皆是我有其中衆生悉是吾

今此の人間世界に我その中にあり、人間皆我が子等
※三界||人間世界、衆生||この世に生きている人

五二八鉢印信 本地地藏

※本地地藏もとの姿は地藏

梵字1字 (その発音) || カカカピサマエイソワカ

六二八秘之大事 本地地藏不動

※本地地藏不動もとの姿は地藏と不動尊

秘||弓材のゆがみを止す道具

梵字と漢字 (その発音) || ランヒリヒリシュウダメンソワカ

咒屋ニ入時はヲ可修其後歌可読

※咒屋に入る時は是を修めるべし、其の後歌を読むべし

木と巧と心に任せ まかせぬならば相やのあるぞ嬉しき (意味?)

七二八鎮之大事 本地阿弥陀定印

※本地阿弥陀定印もとの姿は阿弥陀仏の結ぶ印

梵字1字 (その発音) || アミリタテイセイカラソワカ

向咒屋以大指梵字ヲ書べし、秤ヲ取って顔ヲ

※咒屋に向かって大指で字を書くべし、秤を取っ

読 見ハカラウベシ千刀神ノ伝ヲ伝エ来テ

顔を読み、見計らうべし、千刀神の伝えを伝え

本ノ都ヲ作りツクラン

来てもとの都をつくらん

八二八細工箱之大事 本地釈迦宝蔵

法界定印

唵薩婆紫底慶毘衆陀羅ソワカ其後此文読ムベシ (発音) || ランサツバシテケイビシュウダラニソワカソノ

ノチコノモンヨムベシ

諸仏菩薩一切宝蔵現当二世所願成就 (発音) || ショブツボサツイッサイホウソウゲントウニセイシヨガ

ンジョウジュ

四の「墨差」は現在「墨刺」と書く。とにかく四から八までは大工が使う道具への祈り(お唱え)がかかいてある。

九二八新 (鮑) 始之事

先ツ護身法如常次二瓶子一双鯉啓掛 (読み) 先ず護身法常の如し、次に瓶子一双、鯉一掛け
絹一疋、鳥目、白米、其外供料各任意 (読み) 絹一疋、鳥目(錢)、白米、その外供料は各の意

に任す

第九は鮑始め、つまり、これまでお唱えが続いたが、この第九で初めて道具(鮑)を使う、その最初にやるべきことを述べる

第九の次に第十、第十一、第十二が来る筈であるが、欠落している。

内師子外師子印 (内師弟・外師弟)

梵語5字 (略) 内五古印 梵字5字 (略)

梵字5字 (略) 内練印 南無仏陀耶外五古印

南無達磨耶 南無僧伽耶 南無娑依仏

南無娑依法 南無娑依僧

南無仏陀教主釈牟尼仏

南無三宝教主四天王

(下欄へ)

南無現在未來過去諸佛王

諸世界如広空如蓮華不着水心清浄

迢於彼稽首礼无上尊

啼薩婆但他誡帝ソワカ

打声ハ三世ノ世マテモヒビキ来テ皆悉ク仏ニ成ル

三遍可打 (三べん打つべし)

「内師子外師子印……」から始まって二コマまでは、第十・十一・十二のいずれ部分か不明。

No. 4

十三二十八社棟上大事 供物如法

梵字2字(略) 三万陀没地南はく梵字2字(略)

金剛楸内縛印 梵語1字(略) 中

農莫三曼荼没他南(1字梵字略) 南無天神王

南無地神王 南無煩惱法王 南無天照太神

天地和合 日月燈明 草木国土 悉皆成仏

迷故三界允 思フニはアキクサカリハナキ物ヲユル

サセタマエ、日廻ノ神

其後三度可打(読み方其の後三度打つべし)

この第十三は、大工が神社の棟上(建前)の時にお唱えする文句が書いてある。

十四 三造作之大事 外縛印

唵日羅々々縛口羅呼ソワカ
金剛七宝瓔珞幡蓋天人集会

君カ代バ千代ニヤ千代ヲサザレ石ノ岩尾トナリテ昔ノ生マデ
八万宝蔵宿精直於現等榮華二世成就

第十四は、大工がものを作る際にお唱えする文句が書いてある

十五 二八修理大事 転法輪印

梵字一三字二波羅々々娑婆訶 宝形印
病即消滅不老妻子妻不死但聞妙音

悉地成就タラタラトニ梵字一三字流ノ木ヲ取テ皮ニ
成スコソ猶ヲ目出度ケレ

第十五は、大工が建物を修復する際にお唱えする文句が書いてある

十六 切掛

木屋ニハ七重ニ七五三ヲ曳淨衣ヲ着シ摺袴ヲ着

新キ物ヲハキ能ク々々精進ケツサイシテ可入

天津児屋根ノ子孫御始候間ハ以其義

彼所ヲ木屋ト云字ヲ伝テ書之秘事云々

事という

この第十六の部の行いは秘密事になっている。

※木屋には七重に七五三を曳き、淨衣を着て、摺り袴を着て 淨衣＝清らかな着物
※新しき物をはき、よくよく精進潔斎して入るべし

※天津児屋根の子孫、御始め候間は、其の義を以って

※かの所を木屋という字を伝えてこれを書く、秘事という

(原文)

※(読み方)

天津児屋根ノ御尊ノ子孫ニ大神・工神トテ、二人 ※天津児屋根の御尊の子孫に大神・工神とて御座、神代始テ有明天皇御宇大和

国字多郡ニ四天王作始給り、今大神・工 御座、神代始めて有明天皇御宇、大和

神ノ末ノ御尊番神匠トテニ神在ス、自夫 国字多郡に四天王作り始め給えり、今大神・工神の末の御尊番神匠とてニ神在す、それ

より

以シハ末代代ヲ継テ、彼所伝フ、然間、大神 以ってしは末代、代を継ぎて彼の所伝フ、

然る間大神

工ノ神一人ノ頭ノ名ヲ取テ其大工ト云々、大工ト 工の神一人の頭の名を取りて其れ大工と

云々、大工と

書テ能タクムと説也、其故ハ師ヲスル程ノ 書いて能たくむと説む也、その故は師をす

る程の

者ヲ大工ト云也、去レバ尋常ノ番匠ト云、番匠ト 者を大工と云う也、されば尋常の番匠と云

う、番匠と

カイテツカイタクムト説也、或ハ番匠ト大工ト 書いてツカイタクムと説む也、

各別の心得有るべし、口伝にあり、

※文中の有明天皇という天皇は実在しない。用明天皇(三十一代)の間違いか？

(大意)

天津児屋根尊という神様の子孫に大み神と工みの神との二人の神がいた。神代から始まって以来、

三十一代用明天皇の時代に、大和国(奈良県)宇多郡に四天王を始めてお作りになられたが、今、

大神と工神の子孫の御尊 番神匠として御一柱の神を存在させた。それより子々孫々継承し伝わ

ってきたところである。その間、大神と工の神の二人の名前の頭文字を一つずつ取り、これを大工

としたという。大工と書いてよく「たくむ」と説む。その訳は、師匠をする程の者を大工と云うか

らだ。そういうことだから普通は番匠と云う。番匠と書いて「つかいをたくむ」と説む。また番匠

と大工とは各別の心得があると云い伝えられている。

第十七は、「大工」という言葉がどのようにして生まれたか、が書いてある。

十八ニ不開印信

(原文)

先光明真言 次ニ法界定印

次ニ无常偈 諸行無常

是生滅法 生滅々已

寂滅為楽

忌日仏ヲ、此文ヲ可唱也

歌ニ云

霧雲晴レ行ク空ノ跡ニココソ心月ハ

顕レニケリ

已上番匠印信畢

元禄八乙亥天(西曆一六九五年)

九月吉祥日

歌の意味

先ずは密教のお唱えをし 次に大日如来の印を結び

次に無常の詩 諸行無常を唱える、すなわち

是生滅法(あらゆるものは移り変わるもので尽きることはない、ということ)

生滅滅已(生まれ出る者あれば、死ぬものもあり)

寂滅為楽(生死の苦しみを脱して仏の理想の世界を求める、ということ)

この歌は次のような意味をもっている。

「霧や雲が晴れて行く空の中に清らかな月が顕れる」(世の中の無常を悟った者にのみ澄み切った心が宿るものだ)という意味。

以上、徳のある僧から大工が密教の秘法を授かった証について、その説明を終わりとする。

第十八は、仏教の宗派 密教の秘法、その大工への授与について述べたもの

(読み方)

先ずは光明真言 次に法界定印

次に無常偈 諸行無常

是生滅法 生滅々已

寂滅為楽

忌日に仏を 此の文を唱うべきなり

歌に云う

霧雲晴れ行く空の跡にこそ心月は

顕れにけり

以上 番匠印信畢